

2020年度

群馬県立女子大学

文学部英米文化学科後期日程試験

入学試験問題

小論文

注意事項

- 1 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子を開くと、問題が左右両ページに印刷されています。印刷に不鮮明な点があれば、手を挙げて監督者に申し出て下さい。
- 3 解答は、解答用紙の所定の欄に記入下さい。

次の文章を読んで、あなたはどのように考えますか。あなたの考えを600字程度で書きなさい。

言葉には力の序列がある。

一番下には、その言葉を使う人の数がきわめて限られた、小さな部族の中でしか流通しない言葉がある。その上には、民族の中で通じる言葉、さらにその上には、国家の中で流通する言葉がある。そして、一番上には、広い地域にまたがった民族や国家のあいだで流通する言葉がある。

今、人々の間の交流が急激にさかんになったことによって、言葉に有史以来の異変が二つおこっているとされている。

一つ目の異変は、下の方の、名も知れぬ言葉が、たいへんな勢いで絶滅しつつあるということである。今地球に七千ぐらいの言葉があるといわれているが、そのうちの八割以上が今世紀の末までには絶滅するであろうと予測されている。歴史の中で、あまたの言葉が生まれては消えていったが、今、言葉は、生まれるよりも勢いよく消えつつある。激しい環境の変化の中で、自然界ではありえなかった勢いで生物が絶滅しつつあるのと同様、都市への人口集中や伝達手段の発達や国家の強制によって、言葉は、かつてない勢いで消えつつある。

二つ目の異変は、今までには存在しなかった、すべての言葉のさらに上にある、世界全域で流通する言葉が生まれたということである。

それが今〈普遍語〉となりつつある英語にほかならない。

英語がほかの言葉を押しつけて一人〈普遍語〉となりつつあるのは、歴史の偶然と必然とが絡み合っていることである。英語という言葉そのものに原因はない。思うに、英語という言葉は、ほかの言葉を〈母語〉とする人間にとって、決して学びやすい言葉ではない。もとはゲルマン系の言葉にフランス語がまざり、ごちゃごちゃしている上に、文法も単純ではないし、そもそも単語の数が実に多い。慣用句も多い。おまけにスペリングと発音との関係がしばしば不規則である。さらに、発音そのものが、それを〈母語〉としない多くの人にとって非常にむずかしい。

ところが言葉というものはいったんここまで広く流通すると、そのようなこととは無関係に、雪だるま式にさらに広く流通してゆくものなのである。通じるがゆえに、多くの人を使い、多くの人を使うゆえに、より通じるようになるからである。実際、通貨でも、多くの人を使う通貨は、多くの人を使うゆえに、さらに多くの人を使うようになる。そのうちその通貨が〈世界通貨〉として流通するようになれば、それは、まさにそれが〈世界通貨〉として流通しているという事実によって、多くの人を使い続け、〈世界通貨〉として流通し続ける。アメリカの経済が黄昏期を迎

えても、ドルがこの先当分〈世界通貨〉として流通し続けるのは、この流通の法則による。通貨がそのように流通するのなら、いわんや、言葉をや、である。流通するがゆえに流通するという点では、〈普遍語〉は〈世界通貨〉よりも、より純粋に自動運動を続けられる。大英帝国が滅びてから半世紀ほどでポンドはドルに〈世界通貨〉の地位を譲ったが、ローマ帝国が滅びてからなんと十世紀にわたってラテン語はヨーロッパの〈普遍語〉としてしぶとく生き延びた。

しかも、である。しかも、今やインターネットという技術も加わった。今や〈普遍語〉は、国境という人為的な壁も、ヒマラヤ山脈やサハラ砂漠や太平洋という自然の壁も、何もかも越えて飛び交うことができるのである。

百年後の地球の運命も定かではなく、いつまで私たちの知る文明が続くかもわからない。だが、英語は、少なくとも私たちの知る文明が存続する限りの〈普遍語〉となる可能性が限りなく強いのである。もちろん、世界の経済情勢が変わるにつれ、中国語、スペイン語、アラビア語なども今とは比べられない重要な言語になるであろう。だが、それらの言葉が英語を〈普遍語〉の座からひきずり降ろし、英語にとつてかわって〈普遍語〉となる日がくるのは考えられない。たとえば、今、気の遠くなるような人口を抱えた中国の経済発展はめざましく、中国語は急に脚光を浴び、学ぶ人も多い。だが、日本人が中国と交易するとき中国語を使うようになったとしても、インドと交易をするときにまで中国語を使う日がくるのを想像するのは容易ではない。（それどころか、やはりめざましいインドの経済発展は、かえって英語の勢力を増やすだけであろう。）ロシアと交易するときまで中国語を使う日がくるのを想像するのも容易ではない。その言葉を〈母語〉として使う人口の多さと、その言葉が〈普遍語〉であるというのはまったく別のことなのである。

水村美苗『増補 日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』（筑摩書房 2015年）

